

トヨタ財団研究助成プログラム
オープンワークショップ（福岡会場）参加記

九州大学大学院人文科学府 修士課程 2年 田中みなみ

私は、6月30日に福岡にて開催されたトヨタ財団研究助成プログラムのオープンワークショップに参加させていただきました。ここでは、同ワークショップの大まかな流れと、全体を通してとくに印象に残った点を提示したのち、それらを踏まえてワークショップの感想を述べたいと思います。今後、同ワークショップへの参加ないしは研究助成プログラムへの応募を検討している方の参考になれば幸いです。

まず、同ワークショップの流れとしては、最初にトヨタ財団および研究助成プログラムについての説明がなされ、助成の対象となる研究の諸条件が明示されました。そのなかでも、とくに焦点がおかれたのは、新たな価値の創造です。「社会に新しい価値を提供できる研究なのかどうか」また、「どのような価値を提供できる研究なのか」という問いは、同ワークショップを通して一貫して意識されていたものでした。そのうえで、助成対象となった研究の経過発表、ないしは助成終了の研究については、その成果発表が行われました。各発表時間は20分であり、そのなかで発表者は、その研究がどのような新しい価値を生み出しうるのか、もしくは生み出したのかということを発表の軸にして自身の研究について報告していました。そして各発表ののちに、質疑応答の時間が設けられており、コメンテーターおよび他の発表者による議論が行われました。その論点は多岐に渡り、ディシプリンや専門の違いを問わず、さまざまな意見が交換されていたように思われます。最後には、すべての発表・議論を踏まえたうえでの全体討論および質疑応答の時間があり、最終的な総括が行われました。ワークショップ終了後には懇親会が開かれ、研究における意見交換だけではなく、参加者同士の交流を深めることもできました。

このように進行された同ワークショップにおいて、個人的にとくに印象に残った点として、新たな価値の創造へのこだわりが挙げられます。上述したように、ワークショップでは、終始一貫して、新たな価値の創造について焦点が当てられていました。各発表および議論において、助成対象となった研究が果たしてどこに向かうのか、何を生み出しうるのか、何を生み出したのかが重要視されており、妥協をせずにより良いものを求める同財団およびワークショップ全体の雰囲気は非常に印象深く、素晴らしいものでした。また、特筆すべき点として、報告および議論の方向性が明確であったことも挙げられます。ワークショップにおいて発表された研究の内容は、文化人類学や歴史学、さら

には芸術など、分野を超えて多岐に渡りましたが、新しい価値の創造を目標としているという点では共通していました。そのため、報告および議論の方向性が一貫しており、全体的にまとまりのある進行および内容となっていたように思われます。さらには、会自体が非常に開かれた雰囲気が進められていたため、コメンテーターおよび発表者だけでなく、その場にいた全員に対して議論に参加する機会が与えられていました。

今回、私は同ワークショップへの参加を通して、助成対象となりうる研究像およびモデルケースの一例を知ることができただけでなく、研究助成プログラムへの理解も深めることができました。実際に同財団より助成を受けている研究の報告を聞くことは貴重な経験であり、今後、研究助成プログラムへの応募を検討するうえで、非常に充実した体験になったと思います。また、すでに述べたように、ワークショップにて行われた発表および議論は、学問の分野の垣根を超えた内容であり、非常に刺激かつ新鮮で、知的好奇心をくすぐるものでもありました。そのため、同財団による研究助成を希望している人にとっても、そうでない人にとっても、大変有意義なワークショップであるように思われます。しかし、そのなかでも同研究助成プログラムへの応募を検討している方は、研究助成の条件や、助成を受けている研究を知るためにも、ぜひ参加すべきワークショップでしょう。